
版ヶ口軍曹 + black & white であります 2 誕生！ 究極ヶ口小隊 もう一つの時空島

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超小説版ケロロ軍曹 + black & white あります 2 誕

生！ 究極ケロロ小隊 もう一つの時空島

【Zコード】

N38280

【作者名】

百花

【あらすじ】

アクアクの復活。新たな精霊の少女。そして、島の神。

ケロロ小隊と弥々華、そして冬樹の新たな冒険がまた始まる。

追記 タイトル改題しました。10 / 31

Episode: 1 始まりの時

真っ暗な世界だった。

光は無く、ただ暗い世界だった。

そこで少年はひたすら走っていた。

少年は後ろから何かに追いかけられていた。巨大な眼に。

「た……助けて！！」

肺が空気を求める、体には鈍痛が走る。

「うわッ！！」

少年は突然、倒れた。

「いたた……」

何かにつまづいたのだろうか？

思わず周りを見回した。

「あれは……！」

なんという事だろう。少年は思わず息を呑んだ。

「クルル！？」

黄色い男はそこに石像のように立っていた。少年はよろけ、後ろに下がる。

「タマママー！？」

今度は黒い少年が、

「ドロロー！？」

若い青年が、

「ギロロ」

赤い男が石像と化していた。

「嘘だ……そんな」少年は思わずある男を探した。彼の一一番の大親友を。

「軍曹ー！」

いた。思わずふらふらと少年はそちらに歩み寄る。

「あ……軍曹……まで」

軍曹と呼ばれた緑の男は、彼もまた石像と化していた。少年がその石像に触れようとした時だった。

「 ッ ! ! ! !

石像が四散した。爆弾でも仕込まれていたかのように。嫌な匂いが辺りを包み込む。

「 …… ! ?

少年は何も言えないまま空を仰ぎ、愕然とした。

隕石が墜ちてきている。

腰を抜かしたまま、少年は茫然自失とした顔をしていた。

爆発。吐き気を催す臭い。

爆発。耳障りな爆音。

爆発。みんなが壊れしていく。

「 嫌だ……」

少年は体を抑えつけ叫んだ。

「 嫌だあああ ! !

「 ッ ! !

少年、日向冬樹は飛び起きた。息が荒い。

「 また……あの夢？」

ひんやり冷えた自室で冷や汗を拭いながら、冬樹は呻いた。

「 また、あの時みたいに……」

冬樹は尻つぼみに言葉を吐き出す。

「 どうしよう……軍曹……」

「 隊長達ばつかずるいよ ! !

ドサツと音を立てて、大量の書類を机に置いた弥々華は声を荒らげた。

「一体なんの事でありますか？」ケロロは弥々華に頼んだ書類を見ながらうんざりとため息を吐いた。

「イースター島の時だよ！！ なんであたしも頼つてくれなかつたのを！」

子供じみた声で弥々華はまくし立てた。

「モアも行つてんのに……なんであたしだけ」

ケロロはそれを聞いて、思い切りため息を吐いた。

「だつて壊れてたでありますよう？ 空間移動装置。水没して」

「ただけどお～」

弥々華はくつたりと机に倒れ込んだ。

「弥々華殿」

ケロロは弥々華の頭の上に手を置いた。

「今度はちゃんと頼る。だから機嫌直して欲しいであります」

「ホントに？」

弥々華は顔を上げた。ケロロはうつくりと頷いた。

「置いてけぼりにしないでね」

弥々華はケロロに頭を寄せる。

「もちろんありますよ」

白い服を来た男は丘を登る。

ラノ・ララク。モアイ像が見つめる彼らの生誕地に男は登つていた。

「こ～か……」

男は一人ごちる。丘の上からはイースター島が一望出来た。

男は片手を突き出した。金属に変化した指先で手首をこすると血液が地面に落ちた。

「悠久なる空と海と大地に封じられし邪靈よ……眠りより目覚め、

古よりの契約に乗りて我に仕えよ

男は静かに目を閉じる。

次の瞬間だつた。紫に似た、赤黒い光の塔が地面から空へと伸びた。塔が切れる。

その隙間からゆつくりと1人のケロン人が姿を表した。

大きな二つの角と左目についている傷、そしてマントをつけたケロン人が降下する。

「誰だ？　俺様を呼んだのは」　「誰だ？」　俺様を呼んだのは

不敵にケロン人は笑つた。

それを見た男も静かに笑つた。

「お前がラパヌイ島に封じられし伝説の邪靈……アクアクか？」

「いかにも。俺様はアクアクだが」

「なら話が早い」

男は1歩下がる。

「俺はナスカ　アンノウン。お前が欲しい。お前の絶大なる力が欲しい」

ナスカはその穏やかな顔立ちに似合わぬ凶暴な笑みを浮かべた。

「手を組もう。お前はある女を消せ。復讐したいやつらもいると聞いた。その女はそいつらの関係者。手を組んで自分達の敵を共に排除するも悪くないと思うが？」

いかがかな？　サラリと続けられた言葉に、アクアクは高笑いを漏らした。

「いいぜ。あんたと一緒に前よりすごいイタズラを考えるのもおもしろいかもしんねエ」

「ご協力感謝する」

ナスカは表情を和らげる。

「もちろん礼はあるんだろうな？」

視線をきつくしたアクアクにナスカは頷いた。

「もちろんだ。この地球をお前にやろう」

アクアクは面食らつた顔を見せた物のすぐに表情を戻す。

「そいつはいいねエ。イタズラし放題の世界にしたいぜ」「では、交渉成立だな」

ナスカは片手を軽く上げる。

「ようこそ、アクアク。能力者の世界へ」
空間が開く。

「待て」

アクアクは突然口を開いた。

「俺様は1人じゃないんでな。他の奴らも一緒に連れて行つてもらうぜ」

そう言つた瞬間、地面が盛り上がる。

現れたのは3人のケロン人と巨大な球体に一つ田と三本の手足がついた怪物だった。

「アクアク小隊参上だ！！」

アクアクは大声でそう名乗る。

その光景をナスカは満足げに眺めていた。

「んん？」

クルルは何気ない仕草でキー・ボードを叩く。日課である『侵略衛星コマワリ』の地球監視映像をチェックしていた時だった。

「なんだ……こりや」

初めは極めて小さな反応だけだった。それがもう一つの反応が現れた時全てが変わった。

爆発的な力。

それが現れ、さらにそれが数を増やす。

そして別のエネルギーの中に姿を消した。

「こりや……」

クルルは事件の始まりを感じ取ると微かに笑う。そうだ、何かが始まる。

To be continued

Episode・2 イースター島への旅立ち

「うえーまだ終わらんでありますか」

ケロロはすっかりダレた表情で書類の山を眺めた。傍らのパソコンには宇宙ワードプロセッサが開かれている。

「隊長……なんでクルルとモアに頼まなかつた訳? 期限近いん
でしょ。侵略記録証明書」

弥々華はキツい目でケロロを睨む。指はギクシャクしつつも、それなりのスピードで動いていた。現在作成中の証明書を保存するとまた新たな物に取りかかる。周りの書類は制作用の資料だった。

「だつて我輩……今月ピンチなんでありますよ。ガンプラの新作出るでありますし。ギロロには怒られるし、モア殿に頼むのは」「分かつた。とにかく手、止めないで。後3日でしょ

「分かつてるでありますよお」

ケロロがくつたりとうなだれる。

それを無視する弥々華は近くにあつた書類を取り、目を通した。すると不意に手が止まった。

「どうしたでありますか?」

ケロロが首を傾げる。

弥々華は書類を見たまま動かない。

「隊長お……」

地の底から這い出る声に、ケロロも固まつた。

「弥々華……殿?」

「隊長!…これどういう事!?」

弥々華らしからぬヒステリックな叫びに、ケロロは無意識の萎縮を感じた。

恐る恐る、突きつけられた書類を見る。

「あ……それ、イースター島の」

「死にかけたつて……何黙つてたのさー」弥々華の声の真剣さに、

ケロロは青ざめる。

「あたし……あなたの部下だよ。隠さないでよ……」こんな大事な事をさあ

ぶつりと呻かれた一言に、ケロロは頭を垂れた。

「弥々華殿……申し訳ないであります」

「反省してゐるならいいけど……頼つてよ。あたしも隊長の事頼りにしてんだからさ」

弥々華がうつすらと苦笑した時だった。

【余暇を有意義にお楽しみの皆様に連絡だぜエ】

「あれ？ クルル」

弥々華とケロロは思わず顔を見合わせる。

【全員、格納庫に集合せよ。全員、格納庫に集合せよ。第三種警戒態勢だぜえ】

どこからともなく響く声に、2人は声を合わせた。

「「格納庫？」」

「で、クルル。いきなり呼び出して何のようだ」

明らかにムツとした表情で腕を組むのは、ギロロだ。なにせ、状況説明も無く、輸送ドックに押し込まれたのだ。腹も立つだろ？

「ククッ……知りたいイ？」

クルルは小さく笑い、問いかけた。

「知りたいから聞いとるに決まつていいだろ？！――」

クルルの隣、顔を真っ赤にして怒るギロロを弥々華とドロロが押さえつける。

「落ち着くで！」ゼルー、ギロロ殿」

「殴るのはまずいよ。殴るのは」

「で、クルル先輩。なんなんですか？」

舌つ足らずながら冷静な声で、タママがクルルに問いかけた。

「いい質問だぜえ。教えてやるよ」

クルルはいくつかキーをいじくり、全員の皿の前に小さなモニターを展開した。

「これは1時間のイースター島のエネルギー画像」

モニターの中の映像は、黒とオレンジと白のみで構成されていた。黒い背景とオレンジの6つの塊、そして白い塊がある。6つの塊は2つだけが形を変えながらゆらいでいた。

「この揺らぐ塊……このエネルギー反応があるものとよく似てたんでな。招集かけさせてもらつたぜえ」

「あるものつて？」

弥々華が無邪気に問い合わせる。

それを聞いたケロロが唐突に口を開いた。

「もしかして、これ……この前闇つた

「正解。アクアクのお田覚めだぜえ」

クルルが言い放った言葉に、ドツグが静まり返つた。

弥々華はその息苦しい沈黙に、周りをキョロキョロと見回した。

「なんか……やっぱそうだね？」

弥々華の呟きに誰かがため息を吐き出した。

「おい」

それなりに広く、薄暗い部屋。

端の方で退屈そうに腰掛けていたアクアク小隊。その中のギロロに似たアクアクギロロは、不意に口を開いた。

「何でしょう」

答えたのはジュエル。監視役をナスカに命じられた女だった。

「奴らが……近付いてきている」

呴かれた言葉にジュエルは怪訝な顔を向けた。

「なんの事です？」

「ラパヌイに奴らが近付いてきている」「ラパ……ああイースター島ですね。奴らとは^{ターゲット}目標の事ですか？」

アクアクギロ口は腹立たしげに舌打ちをした。

「そうに決まっている！！」

「分かりました」

ジュエルは歩き出した。

「シャドウに伝えます。もうしばらくお待ちを」

今度はアクアクギロ口が怪訝な顔を向ける。

ジュエルは小さなため息を吐き出す。

「シャドウは科学者です。あなたをイースター島まで、お送りします」

「やつと着いた……」

日本から最大速力で3時間。

ケロロ小隊はイースター島にやつとたどり着いた。

弥々華は疲れたのか、全身を伸ばし深呼吸を1つ。

「弥々華殿」。こっちであります」

ケロロに呼びかけられ、振り向けば少し離れた場所に天井の無い廃墟があつた。

「ここを拠点にするでありますよ」

「あ、分かつた。了解」

弥々華が頷き、駆け出した時だつた。

ポン

「え？」

背後から響く、軽い音。

思わず弥々華は足を止めた。

「なんの音？」

弥々華が軽い好奇心に振り向いた。

ポンポンポンポン！！

「ひゃ！！」

連續した音。

それと共に現れたのは、カラフルな人魂。

「な……なにあれ？」

きれいなパステルカラーのそれは、地面を軽く跳ね回る。マナマナと鳴き声を立てながら。

呆然と、弥々華が突つ立った。目を奪われる光景に。

「……可愛いかも」

だてにケロロ小隊の曹長を勤める訳ではない台詞だ。

「や！」

だが、弥々華はすぐに現実に引き戻された。奇声の原因は、背中を何かにつつかれたからだ。

条件反射で振り返るが、そこには誰もいない。あるのは廃墟だけだ。

「だつ！」

またつかれた。

「なんなんだ！！」

苛立つた声で辺りを見回すも、やはりだれもいない。だが弥々華にははつきり感じ取れた。

誰かがいる。自分を翻弄するように動き回りながら。

「そこか……」

半ば当てずっぽうに手を振るい、触った感覚を引き寄せた。

「わー！」

捕まえた『人間』から、弥々華は無意識に手を離した。自分と変わらない背丈の子供が目の前にいた。

褐色の肌を露わにした露出度の高い奇妙な格好をし、これまた不気味な仮面を被つて。

弥々華は距離を取る。

「あ……あんた……誰？」

まじまじと見てみれば、それはなかなか面白い服装をしていた。水色のマフラーと黄色の晒に腰巻が原住民を思わせる。ペンダントをして、腕と手首に桃色と緑色のペイントが2本刻まれているのも特徴だった。

それはしばらく静止すると、おもむろに仮面に手を掛けた。ぐつどぎすと、現れたのは中性的な顔だった。どちらかと言えば少女よりの。

可愛らしい。そんな印象を与える顔だ。

頭の上に立つた2本の癖毛も、印象を深めている。

少女はしばらく興味深げに弥々華を眺めていた。まじまじとゆっくりと。

ニツヒ少女は突然笑う。

「イオラナ！！」

突然発された言葉に、弥々華は身じろぎせず立っていた。

「い……いおらな？」

自信無く、弥々華は呟いた。頬が僅かにひきつっていた。

何だよ……」のノリ。

普通に苦手だ。

弥々華の顔には明らかにそんな表情が刻まれていた。

不意に少女は、弥々華の手を掴む。

「 × 」 「 ! 」

「 え？ 何語？」

僅かにケロロと聞こえた気がするも、弥々華には全く理解出来なかつた。

「 …… 」

明らかに表情を曇らせた少女に、弥々華はどうすればいいのか分からなくなる。

「 良く分からぬけど……嫌な気分になつた？」

「 * 」

「 弥々華殿～！！ まだありますか？」

少女の言葉を遮るように響いたケロロの声に、少女は顔を輝かせた。

「 ！！ 」

「 え？ 今隊長の名前……うわあ」

少女は弥々華の言葉を待たず走り出した。

「 …… 」

ケロロの名前を呼びながら走る少女に、弥々華は今日最大のため息を漏らした。

To be continued

Episode・3 精靈と邪靈

「…………」

「ちょっとーー！あんた。」ヒは「

弥々華は半ば引きずられる形で小屋に飛び込む羽目になつた。

「あたー！」

元ドアの枠に頭をぶつけた挙げ句、急に手を離されずつこけてしまつた。

「あいてて……」

弥々華が田を回しながら立ち上がつた時には、少女は軽く手を上げていた。

「イオラナーー！」

「…………イオラナ」「…………」

ケロロ小隊は一斉に返事を返す。かなり慣れた返答に弥々華は面食らつた顔をした。

「つていうか何時目覚めたでありますか？」

「…………。」

「そりだつたでありますかーー！」

「やつぱりなア」

「また厄介な物が蘇つたな」

「本当ですぅ」

「どうした物で」「やろうか？」「

返事をしたケロロ小隊に弥々華は未だに面食らつた顔を続けていた。

「隊長…………」

「あ、弥々華殿。彼女はラナ殿であります。イースター島の精靈、『マナ』が人間になつた人ありますよ」

「へえ……じゃなくてーー！」

弥々華はわたわたと腕を振る。

「言葉が分かんないんだけど」

「なんだ。そんな事か」

ギロロがため息混じりに呻いた。

「階級章があるだろ？ それが翻訳機になる」

「あ、ありがとう」

弥々華はポケットを漁ると、小さな十字架のピンバッジを取り出した。黒と白のちょっと変わったデザインだ。

弥々華はそれを胸に着けると、ポンと押して立ち上がった。

「あの、あたしの言つてる事、分かる？」

ゆつぐりと区切つて話すと、少女は顔を輝かせた。

「分かる分かる！ あなたもスゴい……」

「あ、良かつた。通じた」

弥々華は僅かに表情を和らげる。

「あたしは弥々華。あんたは？」

「イナ＝ラオ！」

「イナ？」

今度は、弥々華とケロロの声が被つた。

「ラナ殿では無いでありますか？」

怪訝な顔のケロロに、イナは笑いかけた。

「イナ、もともとラナ。でも寝ていた時、イオと合つた。で一緒に

なつた。だからイナ……」

「えつと……つまり

「マナ同士だから融合したつて所だろ」

クルルは静かに笑う。

「よく分かんないけど、とにかくよろしく。イナ」

弥々華は軽く右手を突き出す。

「よろしく……」

イナは弥々華の手を握ると、ブンブンと振る。

やつぱ、この子苦手だ。

弥々華は僅かに苦笑した。

「で、さ。さつき隊長と話してた事ってなんなの？」

手を離してもらつた弥々華は、手近な石に腰をかけると、問い合わせた。

「……タイチヨウ？」

「あ、我輩の事でありますよ」

「アクアク目覚めた。だから私も目覚めた」

さらりと言い放つたイナに、弥々華は首を傾げた。

「アクアクつて隊長を殺しかけたけど封印されたなんか？」

「その通り！」

突き抜けた低音。そう表現するのに相応しいその声は、ここにいる誰の物でも無かつた。

弥々華は跳ね上がるよう立上ると宙を睨みつけた。

そこにいたのはギロロによく似たケロン人だつた。ただ角のような物が生え、マントを着け、体に模様が入りひたすら派手だつた。

「初めて見る奴がいるな」

それは口を開くと、弥々華を凝視する。

「お前は誰だ！？」

「俺様か？」

弥々華の声にそれは僅かに口元を歪めた。

背中に背負つていた、黄金の杖^{ロッド}を抜き放つと、辺りを睥睨した。

「俺様はアクアク！！ この島に伝えられし、邪靈だ！！」

アクアクギロロは高笑いをすると、持つていた杖を横に振つた。

「まずい。散れ！」

ギロロの声に弥々華は近くにいたイナとケロロを引き寄せると、空中に飛び上がつた。

アクアクギロロの杖から放たれたのは桃色の光弾だつた。雨のように降り注ぐ光弾を弥々華は回転してかわす。

ケロロ小隊の面々も地を駆け、光弾をかわした。

「重……」

「弥々華殿……」

弥々華は自分の高度がじりじりと落ちていくのを感じた。

するりと、イナとケロロが滑る。

「悪い。ちょっと落とすよ」

弥々華はぐつと高度を下げると地上2m程度の場所から2人を落とした。

イナは軽く受け身を取ると、また高度を上げた弥々華を見上げた。

「モモ力！！」

「黑白風華、発動！！」

弥々華はアクアクギロロをしつかと睨み付けると、腰から抜くよう

な仕草で黑白風華を発動した。

高度を上げ、振りかぶると叫ぶ。

「風華」

「あの馬鹿！！」

地面で見ていたギロロは叫んだ。

「こんな時に短気を起こしやがって」

ギロロは腹立たしげに呻くと、次元転送で飛行ユニットビームソ

ードを呼び出す。

「タママ、ドロロー！ 援護しろ」

飛び立ちながら叫んだギロロの言葉で、タママとドロロは頷いた。

「承知！！」

「了解ですぅ！！」

「招来！！」

弥々華の「」なりになつた体から、斬撃が放たれる。

衝撃波を帯びた斬撃は、アクアクギロロの杖に受け止められた。

「ふむ。悪くない悪戯だ」

アクアクギロロは咳くと、弥々華の攻撃を受け流す。弥々華の姿勢

が、わずかに崩れた。

「 ッ！！」

アクアクギロロの突きが、弥々華の腹部に突き刺さった。

「だが、まだ甘い」

「やろ……」

弥々華は地面に腰を強打した。世界がぐるぐると回る。

「援護などさせんぞ」

アクアクギロロはターゲットを定め直す。

空中に飛んだドロロとタママをじろりと眺めた。

「タマツ！？」

「ウワアツ！！」

2人の悲鳴が重なる。

ドロロはクルルによく似たケロン人に足を掴まれていた。とはいえてクルルで言えばヘッドホンに当たる場所から紫の手が生えていた。だから彼はクルルではない。

タママはと言えば、半魚人を連想させるケロン人に吹き飛ばされた。濃い青の体色はドロロを思わせた。

「タママ！　ドロロ！　」

なお、追撃を受ける2人にギロロは声を上げる。

「よそ見をしている場合か？」

「なに！？」

ギロロが振り返った時には、もう手遅れだった。

「アクアク・インパクト！　」

金色の光線が、ギロロに直撃した。

「イナ殿！！　じつちであります」

ケロロはあちらこちらへと逃げ回りながら、イナを誘導していた。

飛び込んだのは、モアイの影だ。

「大丈夫でありますか？」

ケロロは、手を握っていたクルルに声を掛けた。

「クヒイ……」

クルルは明らかに息を切らしていた。今にも倒れそうなその姿は流石インドア科学者と言うべきか。

「イナ殿」

ケロロは影に飛び込んで来たイナに呼び掛けた。

「怪我は無いでありますか？」

イナはこつくりと頷く。

「それより」

イナは口を開いた。

「アクアク、ふえた理由分かつた」

「ほん……どうかあ？」

クルルが横目でイナを見た。

「本当…… イナ、ウソつかない」

イナは両手を突き出すとクルルを見据えた。

「とにかくイナ殿。話して欲しいであります」

イナはケロロに向かつて頷くと言葉を紡ぎ始めた。

「アクアク封印されたとき、食べられたの覚えてるか？」

「もちろんあります」

ケロロに取つては忘れられるはずが無かつた。

島の神、マケマケの力やケロロ小隊とラナ、冬樹の力を借りてアクアクを封印した後の事だ。

小さくなつたアクアクは、地面から飛び出しケロロを食おうとした。だがその前にアリサが捕られ、ネブラに食べられてしまつたのだ。

「アレはアクアクの一部。そのあとアクアク、6つに別れた」

「あのでけえアクアクが小さくなつたのは分裂してたからつて事か？」

「そう。アクアク、6つに別れて眠つた。そして他の小さなアクアク、取り込んだ」

「あ……つまりアレは、アクアクの融合体でありますか？」

そう、問いかけた瞬間だった。

ギロロの悲鳴が辺りを揺らした。

ケロロは小さく飛び上ると、慌てて立ち上がる。

「ギロロー！」

ケロロが影から出ると、そこにはギロロがいた。タマタマもドロロも、
弥々華もいた。

ただし全員が地に伏せている。

ケロロは思わず言葉を失った。

「貴様は……」

空を飛ぶアクアクギロロの声に苛立ちが宿る。

次の瞬間、ケロロの背後の地面が盛り上がった。

「アクアク～ツ！！」

咆哮を上げ現れたのは、何も取り込んでいない黒いアクアクだった。
アクアクは大きな口を開け、ケロロに飛びかかる。

「危ない！！」

ケロロが振り返った時だった。割りいった黒い影に、ケロロは無意
識な声を上げた。

「弥々華殿！！」

弥々華の体は、そのままアクアクの口内に消えた。

To be continued

Episode: 4 星と死神

「弥々華殿が……食べられた……」

茫然自失。

そんな表現が相応しい顔で、ケロロはアクアクを見つめていた。アクアクはしばらく咀嚼を繰り返す。

ペツ。

「あー！」

弥々華の体が放物線を描く。
くしやり。そんな音を立てて、弥々華は地面と熱烈な口づけをかわす羽目になった。

「弥々華殿！！」

ケロロは慌てて、駆け寄る。

「大丈夫でありますか！？」

「…………隊長…………？」

ゆつくりと弥々華は顔を上げた。

「いたた……多分平氣だけど……アイツなんなの？ 人食べるとかマジありえない」

「いや、あり得なくは無いでありますよ」

ケロロは思わず突っ込んだ。

その瞬間だった。

背後に光が溢れる。

「ゲロ！？ あれは！！」

ケロロは振り向いた。

光が切れる。

「ほう」

シャンと、それは刀を振った。

「……なんで、あたし？」

それは答えるかのように「イッ」と笑うと青い舌を見せる。赤い目と青い舌は正直目に痛い配色だ。

肌は浅黒く染まり服も露出度の高い物に切り替わってはいたがそれはまさしく弥々華の姿だった。

「女だと思って見くびっていたが、悪くない力だ」

人型に変わったアクアクは、笑いをこぼす。

「さて次は抜け殻の始末だ」

そう言つたアクアク弥々華は、黑白風華を弥々華に向けた。ケロロは思わず、弥々華の手を握つた。

「逃げるでありますよ！！」

「了解」

そう言つて立ち上がると、弥々華はケロロを鷲掴みにする。そのまま頭の上に乗せると、勢い良く踏み切つた。

「あつ」

弥々華の体が、そのまま丸に突つ込む。ケロロの体も宙を舞つた。

「え……？」

弥々華はふりつきながら起き上がる。弥々華はまた走り出すと地を蹴つた。

「ぐつ……」

顎から地面に直撃する。

「なんで？ なんで飛べないのー？」

弥々華は体を起こしうたえた。顔が青ざめている。

「弥々華殿！－ 焦つてる場合じや」

「その通り」

ケロロの言葉を遮るように不敵な声が響く。

「絞りカスは死ねエ！－！」

アクアク弥々華は黑白風華を振り上げた。

「弥々華殿オ！－！」

弥々華は目を見開いた。

「こいつを使ええつ！！」

不意に響く、ギロロの声に、アクアク弥々華の動きが一瞬鈍った。
タママに似たアクアク アクアクタママ を押さえつけると短い棒を投げつける。

弥々華は棒を掴むと、アクアク弥々華を睨み返した。
勢い良く抜き放つ。赤い光を放つビームサーべルを。
次の瞬間、耳障りな金属音が辺りを揺らした。

「きやあつ！！」

鎧迫り合い。

敗北者は弥々華だった。

指先を引き裂くよつに、ビームサーべルが飛んでいく。
「終わりだ」

アクアク弥々華は口角を釣り上げた。

「今度は逃がさないぞ」

「弥々華殿、危ない！！」

それと同時にケロロは飛び上がる。奇声を上げながら、アクアク弥々華に飛びかかった。

アクアク弥々華はケロロと共にもんじりうつて倒れた。
「邪魔だあつ」

アクアク弥々華は柄で、ケロロを殴った。鈍い音がした。

「行け、アクアク！！」

地面が不意に盛り上がる。

「ゲ……」

飛び出したのは何も取り込んでいない、アクアク。

「ゲロオーーー！」

ケロロ小隊は、言葉を失った。
ケロロが、喰われた。

「――!？」

それは無意識だった。

背中が不意に粟立つたかと思つと、ケロロの顔が脳裏をよぎる。

『冬樹殿』

確かに呼ばれた気がした。

「冬樹くん、前」

「え、あ？」

冬樹は言葉が喉に引っかかったような感覚だった。桃華の声に顔を上げれば、目の前には理科教師の顔がある。

そういう、授業中だった。

冬樹の背中に汗が伝った。

「田向、ぱつりとしてる、暇があつたら、この問題は、解けないよなあ」

神経を逆撫でるようこ、理科教師は話した。冬樹の顔が真っ赤になる。

「……すいません」

教室が苦笑の波に襲われるのはそれから数秒後の事だった。

「ケロロ……」

ギロロが力無く呻く。

視線の先のアクラクがケロロを咀嚼しているのが分かる。

吐き出されたケロロは地面にぶつかると、力無く倒れていた。

「……隊長?」

ケロロはこくりと寝返りを打つた。色はくすみ、帽子の垂れ耳が取

れ、頭が栗に似た形に変わっていた。

「もう、何もかもメンドクさいであります」

ケロロはまたこりりと寝返りを打つた。

「あっちゃん」

弥々華は頭を抱える。

「ケロロ……大してかわらんぞ。お前」

「隊長殿……」

「可愛いんですけどお……言つてる場合じゃ無いですねえ」

「クークック……」

全員が口々に感想を漏らす。視線はフヌケたケロロに集まつた。

「あに見てんのさあ」

コロコロ転がるケロロにギロロはため息を零した。

その時だつた。

アクアクが、輝き出す。

光が、晴れる。

そこに居たのはケロロの姿を模したアクアクだつた。アクアクギロロに似てはいるが、装飾品は控えめだつた。

「緑の奴の力、手に入れたぞおッ！」

アクアクケロロは高笑いを漏らす。恐ろしくエキセントリックな笑い声だつた。

「さて、アクアク小隊！！ 全員集合」

アクアクギロロの命令に、アクアク小隊は是非も無く従つた。

空中に整列する。真ん中を陣取るのは、もちろんアクアクギロロだ。「黄色い奴の知恵、黒い奴の力、青い奴の技、赤い奴の力、女の能力。そして、緑の奴の統率力……」

アクアクギロロが、凶悪な笑みを浮かべた。

「俺は貴様らの全てを手に入れたぞ！！」

その言葉に合わせるように、アクアクギロロが手を上げた。ズン、と腹に響くような衝撃が地を揺るがす。

「なんだ？」

大地が、ラノ・ララクの大地が盛り上がる。

「あれは……？」

瞬間に作り上げられた茶色い塔に全員が息を呑む。

「さて……」

アクアクギロ口は杖をくるりと回した。

「復讐リベンジと行こうか？」

「あれは！！」

ギロ口は思わず天を仰いだ。空が赤く燃える。

「この島もろとも貴様らを潰してやる……！」

降り注ぐ巨大な石像に、ケロ口を除く全員が悲鳴を上げた。

「ん？」

屋上に横になっていたサブローは体を起こした。空は抜けるように青い。

「なんだろ？ やばそーって気がする」

その独り言に確証はない。勘が働いただけ。

「アツなら大丈夫だよね」

サブローは手に持っていたペンをくるりと回した。

「ね、クルル」

「キース署長！……リドアイル キース署長はいますか！……」
A p d s c o の廊下を、1人の事務員が駆けていた。

「何か用か？」

キースはコーヒーに口をつけ掛けたままの間抜けな格好で静止する。「大変です。空間に異常で巨大な亀裂が発生しました。今月の頭にあつた事件と同じ場所です」

キースは一瞬、固まる。

「空間コードは？」

「『K-66』です。場所はイースター島」

「近くに署員は？」

「識別番号66……A-113小隊、茨田弥々華がいます」

キースは目を見開いた。
「また、あいつか……で、連絡は？」
「携帯電話が通じません。亀裂が障害となっています」
「分かった」

キースは頷いた。

「リップかティトに状況を探らせん。科学署にも監視を続けるように連絡頼む」

「了解しました」

事務員は軽く会釈をすると、部屋を駆け出した。

キースは電話機を手に取ると、忘れていたコーヒーを飲み干した。
「不味いな。冷めたか？」

To be continued

「やべえなあ」

「やばいどこの騒ぎじゃないよーーー！」

モアイ像の後ろにいたクルルの言葉にて、弥々華は空に向かつて絶叫した。

見上げる空は今や蒼さの欠片もない。濃厚な紫に満たされていた。さらに分厚い雲の向こうで薄く光が出ていた。

星ではない、それは

「また石像を降らせる気かーーー！」

ギロロは空を仰ぐ。

宇宙からモアイ像に似た石像を降らせる事は前の事件でも起きていた。

「その通り」

空から禍々しく声が降り注いだ。全員が無意識に顔を見合させる。

「こ明察だなあ。赤いの」

全員の姿勢が塔に移つた。

次の瞬間、塔にはアクアクギロロの半身が投影される。

弥々華は僅かに顔を歪めた。

「だが、趣向は変えようではないか」

そう言ってアクアクギロロはいくつかの石像を引き寄せた。

「緑の奴と一緒にいた人間……奴の所にこれを落とせば、どうなると思う」「

「止めるーーー！」

ギロロが声を荒らげた。

それを見たアクアクギロロは僅かに嘲笑を漏らす。

「フユキと言うのか、奴は」

ふんと鼻を鳴らしたアクアクギロロは手を伸ばす。東の方向へ。

「待て！…」

ギロロが叫ぶ。

だが、間に合わない。

石像は飛んでいく。

東へと。

「お前……」

その言葉を漏らしたのは弥々華だつた。

「なにやらかす氣だよ！… 街を壊滅させる氣か！… ふざけんな

！」

弥々華の頬が赤く染まる。

目はきらつき、アクアクギロロへ明らかに敵意を見せる。

その瞬間だつた。

不意に稻光が空を裂いた。

雷鳴が轟く。

気が付いた時には、雨が大地を濡らしていた。

「一時凌ぎにはなつたつて奴だな……」

クルルが低く囁く。

その時には既にアクアクギロロは姿を消していた。

日々当たり前の日常、それは急に壊れる。

夏美と小雪は今、日向家に向かっているところだつた。

時刻は5時を少し回つた所。

ここは商店街から一步入つた中道だ。家まではまだ距離がある。

「小雪ちゃんごめんね。買い物なんかにつき合わせちゃつて。」

「いえいえ、夏美さんが困っているあれば、いつでも助けに参上しますよ。」

そういったほほ日常的な会話をしていた時だった。

不意に辺りが暗くなってきた。一人はそれに気づき、空を見上げると赤黒い分厚い暗雲が空を覆っていた。

「あれ？ 今日の天気予報は晴れだって言つてたのに。」

「変ですね～？」

その時だつた。その雲からなにかが降つて来る。しかし、それは雨ではなかつた。例えるな隕石のような物が6個ぐらいその雲から落ちてきたのだ。しかも、その内のひとつが今こつちに向かつてきている。

「ちよちよっとあれ、こつちに向かつてきてない！？」

焦り始めた夏美の手を小雪はしつかりと掴んだ。

「夏美さん、逃げましょう……！」

小雪と夏美はあつと/or/いう間にそこから逃げだした。小雪は忍であつたため、こういうことには対応しやすいのだ。そして、そこから離れて少し後に落ちた。一人は無事だつたが、隕石らしきものが落ちた所は建つていた家類が全壊、また半壊していたりした。

誰もいなかつたのは不幸中の幸いと言えた。

2人は恐る恐る隕石に近寄つた。

「これって……」

それはモアイだつた。しかし、普通のモアイと違つて不気味な模様と額に目みたいな模様がついている。それと色が普通のちがつて、やや黒っぽい。

「なんでこんな物が空から？ まさか、またボケガエル達の仕業？」

夏美はいつものようにケ口口の顔を思い出す。

次の瞬間、夏美は自宅へと駆け出していた。

その光景を見たのは夏美と小雪だけでは無かつた。

「これは？」

冬樹を狙つた隕石は日向家近くの公園に落ちていた。
じっくり眺めること30秒。

冬樹は不意に寒気を感じた。

「まさか……」

冬樹の耳に蘇る。

あの邪靈の声が。

「大変だ！！」

冬樹は駆け出す。日向家へと。

「一体なんなんだよ……！」

弥々華の怒鳴り声が反響する。

隣にいたタママは堪らないと耳を塞いだ。

全員がいるのは、輸送ドックの中だった。弥々華、タママ、ギロロ、
ケロロ、ドロロ、クルル、イナの順で直接床に座っている。

「あいつは、なんなの？」

弥々華の叫びに、イナが弥々華の腕を掴んだ。

「おちついて。説明するから」

その言葉に、弥々華は僅かに体の力を抜いた。

とは言つてもいまだにキツい目で辺りを睨みつけている。

始まつたイナの説明はシンプルだが、的を射た物だった。

アクアクは、イースター島が緑に覆われていた頃からいた邪靈であること。

アクアクを封じ込めていたモアイ像が、各部族の争いにより破壊さ

れた事。それによつて現れた小さいアクアクは手分けして退けた事。

「でも、今回のアクアクはちがつたの」

「何が違うの？」

「あのアクアク、とても大きい。強い。マケマケ様の力でも無いと倒せないくらい」

「マケマケ様あ？」

弥々華は怪訝な声を上げた。

下らない。そんな響きが言葉に込められる。

「なによその胡散臭い名前？ しかも弱そうだし」

「マケマケ様、バ力にするのダメ！…」

「え？」

イナの剣幕に、弥々華が僅かに引く。

「バチ、当たる！…」

「はあ……『ごめんなさい』

ま、宗教バ力にしたらまずいか……。

そんな考えが頭をよぎり、弥々華は軽く謝罪を吐き出した。

「で、これから俺たちはどうするべきだ？」

一段落ついたと判断したギロロはおもむろに口を開いた。

「作戦を練るべきだろ」と思つただが？

タママとドロロが頷く。

「でも、どうするですか？ 放水機も無いのですし」

「何より、時間がどの位あるのかも分からぬでござる」

「時間ならあと8時間ってところだ」

クルルが突然口を開いた。

「この雨雲が去るまでおよそ8時間……。それまで奴も仕掛けては

来ねえだろ」

「そつか……」

ギロロが口を開き、目を閉じた。

「オイ、ケロロ。お前はどう思つ？」

ギロロの問には半ば条件反射に近かつた。

「……別に……どーでも」

その無気力な言葉にギロロの腕がびくりと動いた。

「貴様」

ドスの利いた声が空気を揺らす。

弥々華とタママは顔を見合せた。

「…いぐら弱体化させられるとほ言えなんだそのサマは…！」

かしりと丂口の腕が、ケ口の襟首を掴む

貴様は隊長なんだぞ！！

!

ケロロの田が、ゆづくりと開いていく。

#

「どうでもいいとしか、言えんのか？ 無関心を決め込むか？」そ

んな男では貴様は無いはずだ」

一 答えろ、ケロロ

苦しい離して

جیلیون

「アリババ」

「井戸の口」

キロロは不意に、鳴く。

共鳴。

それは孤独な共鳴だった。

「サロサロサロサロサロサロ」

道隨の口

卷之三

弥々華が

「クルクルクルクルクルクル
クルルが続く。

不思議な和音で混ざり合つ共鳴。

それが、ケロロの心を氷解させた。

「ゲロゲロゲロゲロゲロゲロ」

ケロロの共鳴が混じり合つ事で、共鳴はより心地よい音に変わっていく。

「ギロギロギロギロギロギロ」

「ドロドロドロドロドロドロ」

「タマタマタマタマタマタマ」

「モモモモモモモモモモモモ」

「クルクルクルクルクルクル」

「ゲロゲロゲロゲロゲロゲロ」

船内を共鳴が満たして行く。

全員が拳を振り上げ、共鳴する。それは、いつもの光景でもあった。

「ケロロ」

「隊長殿」

「軍曹さん」

「隊長」

全員の視線の先には、いつもの顔に戻ったケロロがいた。

弱体化していても、何時もと変わらないあの顔だ。

「よししゃあ！！ ケロロ小隊、これより作戦会議にはいるであります！！」

ピンと伸ばされた右手。

それに続き全員が手を振り上げた。

「――――解――――」

「ケロオ……」

「あっちゃん」

弥々華が小さく呻く。

ギロロの手に当たつて倒れたケロロを見ての呻きだった。

冬樹が駆け込んだのは格納庫だった。

「モアちゃん？ リップさん？」

「冬樹さん」

「冬樹君。どうかしたの？」

キヨトンとした顔のリップをよそに冬樹はモアに歩み寄る。

「大変なんだ！！ またアクアクが復活したんだ」

「本当ですか！？」

モアの手が止まる。

「つてゆーか……予想正解？」

「どういう事？」

「モアさんが言つてたの」

リップが不意に口を開いた。

「アクアクが復活したかもつて。私も事情は聞いたから分かるのよ

リップの口は淀みを知らない。

「空間関係の調査のつもりが大変な事に巻き込まれたみたいね」

目を細めて笑うリップ。

「準備出来ました！！」

「ありがとう、モアさん」

リップはそう言つて、輸送ドックに乗り込む。

「あの……僕も連れて行つてください……」

冬樹はリップを見上げて言つた。

「分かつたよ。早く乗つて」

その10秒後、輸送ドックは田向家を出発した。

To
be
con-
tinued

Episode・6 朝

弥々華は、輸送ドックの中で目を覚ました。

端の方で眠ってしまったようだ。床に直に寝ていたせいか、体が痛かった。

薄暗い機内で固い毛布を乱雑に畳む。

反対側の端にはケロロとタマママが寄り添つて眠っていたのが、弥々華には見えた。

小さな子供のようだと言うのがその時抱いた弥々華の感想だったりする。

さらにその隣ではイナが座つたまま熟睡していた。

僅かに聞こえる物音は、上のコックピットにいるクルルだろう。崩れぬリズムが耳に心地良い。

弥々華は静かに操作盤を動かすと外に出た。暖かな空気が体を包む。雨上がりの空は心地よく晴れていた。朝露が、足首を柔らかく濡らす。朝焼けは美しく、弥々華は小さな嘆息を漏らした。

「起きたか」

「あ、おはよ……」

声を掛けたギロロは腕を組み、塔を見つめていた。

「どこかに水が積んである。顔を洗うといい

「うん」

弥々華はこつくりと頷いた。

眠気が取れないのか、その顔はいつにも増して幼い。

「作戦、上手いくかな……」

軽い欠伸と共に、弥々華は言葉を吐き出す。

「ああ」

「そうだよね

弥々華は気合いを入れるよう、パンと手を叩いた。

「頑張るわ

その時だつた。

「弥々華あーー！」

「伍長！ー！」

柔らかなソプラノが2人、空から降り注いだのは。
2人は顔を見合せると空を見上げた。

「な？」

2人は口を開けたまま、それを凝視する。

それ　予備に作られた輸送ドッグ　は、ゆっくりと地面に着陸した。

「弥々華！」

開いたドアから飛び出した緑の影が弥々華に抱きつく。

「アレ？　ちょっと小さくなつたね」

「つむせー」

弥々華はブスッとした顔をしていたが、振り払う事はしなかつた。

「伍長！ー！」

「ギロロさん」

リップに続いて駆け下りてきた冬樹とモアを、ギロロは一瞬凝視した。

「ケロロなら中にいる」

言いたい事もあるが、話は聞かないだろう。

指差されたドッグに駆け込んだ2人を見て、ギロロの思いは確信に変わっていた。

「で、弥々華」

「何？」

やつと解放された弥々華は肩をぐるぐると回している。

「なにがあつたの？」

「それは　ー」

こつちのセリフ。

その言葉は一瞬で冬樹とモアの悲鳴に飲み込まれた。

互いの状況説明が終わつたのは午前6時を回つた時間だつた。

その間ケロロ小隊とイナは、3人が持ち込んだ食べ物やら機内にあつたレー・ションを腹に詰めこんだ。

なんにせよ空腹だつたのだ。

昨日の昼食以来何も食べていいないのでから。

「つまり、アレは大規模な侵略を目指してるって事？」

奥東京市に落とされた石像の話が終わった時だつた。弥々華が疑問を何気なく投げかけた。

紅茶を啜りながらクルルを見る。

「いや、違うだろうな」

クルルはノートパソコンの画面から視線をそらさず言った。

「あれの狙いは恐らく、俺たちと日向冬樹だ。他の奴らは顔も知らないだろ？」

「なんだ？」

ケロロを膝に乗せた冬樹が軽く顎を引く。

「そう言えば」

そう言つたのはギロロだつた。

「アクアクは何故復活したのだろうか？」

「ああ」

クルルが小さな返答を呴く。

「第三者の介入」

弥々華とリップが、顔を上げる。

「その線だろ」

クルルはごく軽くそう言つた

「第三者つて」

「まだ誰か分からねえけどよ」

リップの言葉を遮ったクルルはくつくと笑う。

「お前らには付いてるんじゃねえの？ 田星が、よ」

その時だった。

開け放たれたハツチに黒い影が現れた。

「失礼するで」「ざる」

ドロロは立ち上がりながら口を開く。

昨夜から偵察に出ていた事を、弥々華は今更ながら思い出した。
「アクアクが動き出したで」「ざる。恐らく、始まるで」「ざる」

「分かつた」

ギロロは返答後、立ち上がる。

「総員、第一級戦闘体制！！ 出るぞ！」

「」「」「」「」「解！！」「」「」「」

その言葉が合図だった。

クルルとモアは、「ツクピットに駆け込む。

ハツチが、閉じる。

ごく僅かな浮遊感が、ドッグの飛行を教える。

「ギロロさん」

「なんだ」

ギロロを呼んだのはリップだった。

「手伝える事、ありますか？」

真剣な顔に、ギロロは視線を緩めた。

「志願兵《来るもの》は拒まん。冬樹とケロロの護衛を頼む

「はい」

「『はい』では無い」

毅然とした声に、無意識にリップの背が伸びた。

「『』『解』だ」

「了解！！」

リップは見よう見まねで敬礼を決めると、冬樹の方に歩み寄った。

全員に気合いが入る。

弥々華も例外では無かつた。

靴ひもを縛り直し背筋を伸ばし座る。

「おい」

「クルル？ 運転してなくていいの？」

突然、現れたのはクルルだった。クルルは弥々華の隣にだらしなく座り、顔を見上げた。

「ああ。自動操縦に切り替えた。抜かりはねえよ」

「そう」

会話が途切れる。

「……おい」

「なに？」

また唐突に口を開いたクルルに弥々華は怪訝な顔を向けた。

「お前も戦うのかア」

「当たり前じやん」

「くくっ……力を吸われても闘志までは、つてか？ 血の氣が多い
こつて」

「悪い？」

開き直りの一言に、クルルはしばらく笑う。

「力が無くてどう太刀打ちすんだよ」

「そんなん、気合いと根性でカバーするつきやないでしょ？」

「くっ」

クルルが奇声を上げる。

「くっくっく……くーっくっくっく……」

「なに笑つてんの？」

弥々華は苛立つたのか、眉間に小さなシワを寄せた。

「いや、似てきたなと思つてよ」

「誰に？」

「隊長とオッサン？」

今度は弥々華が吹き出す番だった。

「似てきてないよ」

笑いながら、吐き出す。

クルルは、ニヤリと笑い、立ち上がった。そして、何かを放り投げた。

弥々華がそれを軽くキャッチする。

「なにこれ？ ブレスレット？」

それは黄色いブレスレットだった。クルルの階級章に似た渦巻きがついている。

「即席の武器転送装置だ。お前の階級章には付いてねえ機能だぜえ」
その言葉を聞いた弥々華の脳裏にギロ口がいつも武器をどこからともなく出す様子が浮かぶ。

「やる。しつかり役立てなあ」

クルルはそう言って、歩き出した。

「クルル……ありがとうーー！」

弥々華は彼の背中に柔らかな笑みを見せた。年相応な、笑顔を。

「くつくつく。後で礼よこせよなあ」

そう言い残し去るクルルの背中を弥々華はいつまでも眺めていた。

「ふふふ……良い天氣だ」

アクアクギロ口は塔の前に立つと不敵に笑う。

「さて続きを始めるとしようか？」

「待て！…」

響き渡るのは凜とした声。

「貴様の野望、やがらせはせん！… やがらせはせんぞ！…」

ギロ口の一言を皮きりに、ケロ口を覗いたケロ口小隊は飛び出した。

「タママインパクト！…！」

牽制の一撃が走る。

アクアクギロ口は杖を抜くと、それを軽くいなした。

「「かかつたな」」

2つの声が、ハモる。

アクアクギロ口の背後には、ビームライフルを構えたギロ口と弥々華。

2人は同時にトリガーを引いた。

「チイツ」

アクアクギロ口は舌打ちすると急下降。

追いかけるのはギロ口。

弥々華はそのまま追撃態勢に入った。すぐにトリガーを引く。

「ふははは！… ド下手くそめ」

アクアクギロ口は嘲笑う。

弥々華の弾丸は掠めもしない。

「初めてなんだからしゃあないでしぇうがつ！…」

弥々華は叫び返すと半ばヤケになり、トリガーを引きまくった。

「あの馬鹿」

呆れたように、ギロ口が呻いた。

とはいえ場はかき回される。

そこに飛び込んだのは、ドロ口だつた。

鬼式を纏い、アクアクギロ口の背後に回り込む。

「零・次元斬！…」

その一撃はアクアクギロ口に確かに入った。

Episode : 7 Battle royal!

弥々華が見たのは鬼式を付けたドロロが大技をアクアクギロロに決めた所までだつた。

視界が、反転する。

腕に走つた痛みに眉が潜まる。

数メートルの高みから地面に打ち付けられた。背中で飛行ユニットが弾けたのが、感覚で分かつた。

破片は突き刺さる事無く次元転送されたが、全身の痛みが意識を奪い掛ける。

弥々華は必死で息を吸い込み、目を見開いた。氣絶など、出来る訳が無い。自分を突き落とした元凶を睨み付けた。

触手を伸ばし、トドメを刺さんとするアクアククルルに向かい、弥々華はニイツと笑う。

「これでもド下手くそつて言える?」

呼び出したのはハンドガン。地球製、実弾入り。突っ込んで来たせいで1mを切つた距離がさらに縮まる。

「この距離なら、外せないよね」

響くのは一筋の銃声。

ドロロは零・次元斬を止めたアクアクギロロに笑いかけた。暗殺者の笑みは絶対零度に等しい。アクアクギロロは僅かに怯んだ。

「おぼり臍分身」

指を2本立てたドロロの姿が揺らぐ。

「新・暗殺術ネオ・アサシン虚偽技!—!」

現れたのは鬼式を身につけていない、たくさんのドロロ。彼らは一斉に小刀を抜き放つ。

「臍分身斬！！」

「小賢しい！！」

「甘いでござる」

小刀を振り上げたドロロ達にアクアクギロロは杖を抜き振り回す。撃たれた光線が分身を消し去っていく。

「悪戯ならこっちが上手だと」

「甘いでござる」

その言葉にアクアクギロロは振り向く。

「おどりか」

「零・次元斬！！」

一刀両断。

アクアクギロロが最後に見たものは背後から襲い来る白銀の刃。

輸送ドッグからリップとケロロが飛び出す。
符に乗つたリップはケロロと共に宙を舞つた。

「ターゲット目標発見しました」

視線の先には、こちらを睥睨するアクアクドロロ。リップは符を旋回させ、辺りを伺つた。

アクアクドロロが刀を抜いた。飛び上がる。

「よつしゃ、今であります」

「はい！！ 行つけえーーッ！！」

返事と共に振りかぶる。

「ゲエローーー！」

ケロロの絶叫が空気を切り裂く。アクアクドロロはケロロを斬ろうと刀を構えた。

刀は振り下された。

「防！」

ケロロの背中に張られた符がバリアとなり、斬撃を弾く。

「ゴシン！！」

鈍い音を立て、アクアクドロロとケロロの頭が衝突する。バリアは割れ、アクアクドロロはふらふらとよろめいた。

「よし、成功ですよ」

リップは笑顔でケロロを回収し、アクアクドロロの額に数枚の符を張り付ける。

「爆！！」

リップの符が爆破された。

僅かに漂う嫌な臭いに、ケロロは顔をしかめた。

「リップ殿……やりすぎ」

この作戦、発案者はリップである事を追記しておこう。

すっと息を吸い込む。

「アクアクインパクト！！」

「タママインパクト！！」

2つのインパクトが、拮抗する。弱まる事を知らない光線は押し合いい、溶け合う。

爆発。

突然の爆発にアクアクタママとタママは吹き飛んだ。

タママは横つ飛びに転がり側転で勢いを殺す。飛び上がればそこに着弾するインパクト。

タママはかわす。

距離を取り、時に詰め。

アクアクタママの打ち出すインパクトをかわし続ける。

「やつぱり

タママは飛び上がった。

「偽物にこれは使えないんですね！！」

出したのは右手。そこに溜まるのは、嫉妬の力。

「食らえ！！ 嫉妬玉！！」

ドスが効き低くなつた声と共にサッカーボール大の黒いエネルギー弾がアクアクタママに着弾した。

斬撃が噛み合つ。

ビームサーベルと日本刀は噛み合い火花を散らした。

拮抗した力は弾き合つ。

「フン……」

ギロ口はビームサーベルを握り直すと鼻を鳴らした。

「貴様が奪つたのは能力だけか……」

接近し、切り結ぶ。

その瞬間、ギロ口には理解出来た。

アクアク弥々華は剣術が出来ない。能力も使いこなせない。

黑白風華を棒きれのように力任せに振り回すだけと言つことが。

ギロ口は駆ける。詰めた距離に、アクアク弥々華は袈裟懸けに刀を振つた。

ギロ口は軽く腰を落とした。

右に体重を移せば頭の上を紙一重で刀が滑る。

ギロ口はビームサーベルを上から下に、振り上げた。地を舐めた刃

が肉を断つ感触が手に伝わった。

5体のアクアクが崩れ落ちる。

「……つた？！」

弥々華は横たわったまま、その光景を見つめた。手には未だ固くハンドガンが握られている。胸の上に置き、構えたままだ。

「やつた……の？」

「いや……まだ奴がいる」

ギロロのその言葉が引き金となつた。

「その通り

塔の上から、声が響いた。

小さな影が舞う。

「まだ俺がいふといふことを忘れないで欲しいものだな」

「隊長のアクアク……か？」

アクアクケロロは辺りを見回しながら嘲笑を漏らした。

「ああ、そうだとも」

そう言つてアクアクケロロは両手を伸ばす。

「さあ、蘇れ！！ 我が」

その瞬間だった。

「させません！！」

「モア！」

思わず弥々華が、感嘆の声を上げた。恐怖の大王に戻つたモアが、舞い降りたのだ。

「ハルマゲドン！！」

モアは隕石が付いた巨大な杖をくるくると回す。

「1／10000《1万分の1》」

「な」

地を揺るがす衝撃が走る。

惑星をも滅する一撃が、アクアクケロロだけでなく、地を穿つ。

爆風が走り、思わず全員が顔を覆つた。

「……うわ、すげ」弥々華が小さなため息を漏らした。

気がつけば地面にクレーターが出来、アクアクケロロは姿を消していた。

弥々華は開いた口が塞がらないと、ぼんやり考えた。
とにかく規模が凄まじい。

「モア殿！」

ケロロはリップの符から飛び降りると、地面に降り立つたモアに抱きついた。

「おじさまーー！」

モアはケロロを抱きしめ、地面にぺたりと座り込む。

「これで元に戻れるであります」

「よかったです……おじさまあ」

モアは涙を流しながら、腕に力を込めた。

「あの女……」ヒヤヒヤとばかりに抱きしめやがつてえ

「まあまあ

鼻息荒く嫉妬の炎を燃やすタママをドロロは静かに宥める。

それを弥々華は静かに傍観していた。

「どうしたんだ？」

「ギロロ……」

弥々華が小さく呟く。

「まだ、力が戻らないの。アクアクは倒した筈でしょ？ それなのに」

弥々華はぽんやりと手のひらを見つめた。

「隊長も、そうみたいだし」

ギロロは田を見開き振り向く。

「まさか」

ギロロの視線から、アクリアク達の体が消えた。

「おい！！ 全員まだ気を抜くな！！」

ギロロが怒鳴る。

「奴はまだ、死んでないぞ！」

その時だった。

【オイ！！ 後ろだ】

柄にもなく焦燥したクルルの声が空気を裂く。

全員が、振り向いた。

空気が凍りつく。

「…………嘘…………でしょ」

弥々華は、必死で吐き出した。

クレーターの真ん中に、黒い塊（くろあら）が蠢（うごめ）く。

地を這うような声が、辺りに響く。

弥々華は、動けなかつた。

それは恐怖のせいだつた。

咆哮が、轟く。

次の瞬間、黒い塊は勢い良く膨れ上がつた。

「なんなの、あれ？」

輸送ドッグのコックピット。

窓の外を見た冬樹が震える声で問い合わせた。

「俺にも、分からねえ……が」

クルルはつづかえたような言葉を吐き出す。

「恐らく、まずい事になつてゐるぜえ」

傍らに置かれたノートパソコンと窓の外を、クルルは交互に凝視した。

「クルル……」

冬樹は青ざめた顔で、呟いた。

To be continued

弥々華はふらりと起き上がると、その黒い塊をぼんやりとした頭で見つめた。言葉は全員に無い。

黒い塊は雷雲のように膨張し、巨大化していく。

弥々華は脳が焦げるような恐怖を感じた。

今にも逃げ出したい。

噛んだ唇から血の味が広がる。

怖かった。ただただ、怖かった。

塊は巨大な人型と化した。未だ煙のようなもやで構成された姿は、昔話の巨人のようだ。

不意に、光が放たれた。

紫の悪意を秘めた光に、全員が目を覆う。

霧が、晴れた。

手を避けた時、弥々華は目を見開いた。身の丈は5メートルを超えているだろう。アクアクギロロがベースとなつた体は信じがたい大きさに膨れ上がっていた。

「ははははは！ よくも俺様をコケにしてくれたな！！」

大音声に、弥々華は耳を塞ぐ。ギョロリと見開いた6つの目に、弥々華は嫌悪感を覚えた。吐き気に近い、恐怖と嫌悪が体を満たす。左右3本づつ生えた腕が、うねるように伸ばされた。

「アンドロメダインパクト！！」

上を向いた口から吐き出されたのは、無数の光線。

「やば」

流星群の如く降り注ぐビームの中を弥々華はふらりと立ち上がると疾駆する。

ケロロ小隊の面々が逃げるのが横目に見えた。着弾したのは、目の前。

「 ツ！」

くの字になつた体が吹き飛んだ。

「く……」

目の前に血飛沫が散つていた。自分の額から流れ落ちたそれに、呻き声が漏れる。

体をやつとの思いで起こす。見上げる頭上は閃光と銃弾の飛び交う戦場。

右手を突き出して飛行ユニットを呼び出すと、弥々華は飛び上がる。ふらふらと安定しないのは、自分のせいいかと自嘲した。

「ビームソード2本……来い……」

確認するように咳き、呼び出す。握つて抜き放つと、意外な重さに顔が歪んだ。

顧みる暇すら無い。

ギロロは両手に持つたランチャーをひたすら打ち続けた。巨大化は想定外だった。

払うように動く手をかわし、武器を持ち変える。使い慣れたビームライフルを撃つ。

「効かんか」

ドロロの斬撃が極めて浅い傷を付けたのが、見えた。

リップの符が爆破され、タママのインパクトが目を潰す。さらにその目に、ギロロは追撃をかけた。

目をつぶせねば、なんとか。

「グアアアアアアアア！」

突如響いた絶叫に、全員の耳が飛び、体が跳ね上がる。鼓膜が破裂するような衝撃が、耳を貫いた。

当然のように全員が必死で耳を塞いだ。

その時だった。

「マジかよ……」「

輸送ドッグの中でデータ収集をしていたクルルは呆然と窓の外を見つめた。

全員が、アクアクの手に握られていた。
比喩ではない。

全員が握りつぶされんばかりに体を握られていた。
クルルには聞こえない悲鳴が聞こえた気がした。

「クソ！！」

クルルは柄にもない怒声を上げた。
「キヤア！！」

「ああ？」

後ろから聞こえた悲鳴に振り返る。

「クルルさん！！ 私は逃げられたんですが……みんなが」「
ああ分かつてる」

クルルは駆け込んだリップに腹立たしげに唸ると、操作盤に指を走らせた。

「捕まつてろよ……」「

ドッグを浮上させ、急加速。目指すは敵地。

喉が風に似た音を立てる。

肺から酸素を絞り出され、体が軋む。目の前が、暗い。

「…………たいちょ ギロロ タママ ドロロ みんな」

このまま、死ぬ。

弥々華はぐつたりとしたまま、呻いた。

力があれば。

力があれば、勝てるのに。

「…………クルル」

腕に食い込むブレスレットが、意識を覚醒させる。

「『めんね…………』

引きつった悲鳴を上げながら、弥々華は確かに『死ぬ事』を覚悟した。

守れなかつたの?
あたしは。

助けに来てくれた人も。

大切な友達も。

この世界すらも。

「ちくしょ…………」

なんで。

なんで。

力が無かつたから?

あたしに、力が無かつたから?

「力があれば、守れたのに」

弥々華は吐き捨てた。

「ちくしょ――――！」

のけぞり絶叫する。

恥も外聞も無く、弥々華は叫んだ。

「やかましい」

「ぐあつ……」

さらに強く締め付けられ、弥々華は頭を垂れた。

「ちくしょ……もつとあたしに力があれば……力があれば……」

「抜け殻どもめ。そろそろ、死ねツ！－」

アクアクは6本の腕を振りかぶった。

凄まじい強風に、弥々華の呼吸が止まる。

体の締めつけが不意に止んだ。体が瞬間に無重力を感じる。

「あ……」

落ちる！！

目を閉じたまま、弥々華は声にならない悲鳴を上げた。

「勝てないの？」

弥々華は空中で呻き声を上げた。

「こんな奴にも、あたしは、あたし達は勝てないの？」

弥々華は歯を食いしばった。

「負けたくないのに……」

頭が、はつきり冴えてくる。

「あたしは、勝ちたい！！」

その時だった。

光が、輝く。

奇妙な感覚だつた。

その光に包まれた瞬間体が軽くなり、落下が止まつた。

「力を貸そう。」

耳元に響く、柔らかい声。

「誰？」

弥々華は無意識に辺りを見回した。

「我が名はマケマケ。

君たちの決意に呼び出された。」

柔らかだが威厳ある声に弥々華の背が伸びる。

「力を貸してくれるの？ あれと戦う力を」

「無論だ。」

君たちは戦つか？」

「はい」

間髪入れず、弥々華は頷いた。

その時だった。

暖かな風が、弥々華の体の中に流れ込む。

「ありがとう。マケマケ」

弥々華は小さく、その言葉を口にした。

「なんだ？」

アクアクはその一点を凝視した。握りしめた小さな命を放り投げた瞬間に光が彼らを消したのだ。

「なにが起きている」

その光はアクアクにとつて、確かな嫌悪感を抱かせるもの。そう。それはまるで、以前復活した時に現れたような光だった。ケロロに宿り、自分を滅そうとした光だった。

次の瞬間だった。

光が、解ける。

消えた訳ではない。

6つに光は別れ、確かな形を作る。

「おーまたせしましたあつ！！！」

明るい元気な声が空気を切り裂く。

「貴様は！？」

アクアクは目を剥いた。

そこにいたのは緑の体、一葉を頭に乗せたケロロ。マケマケケロロ
その人であつた。

「ケロロ軍曹、大復活であります！！」

空中に仁王立ちするケロロにアクアクは高笑いを零した。

「貴様一人でこの俺様に 」

「一人では無い！！」

凛とした声が空を裂く。

光が、1つずつ形を構成していく。

赤いコートと帽子、白と黒の二丁拳銃を構えたギロロ。赤い鉢巻き
と西洋の甲冑、剣を握ったドロロ。

ペンギンに似た生き物の着ぐるみを来たタママ。青い軍服に槍をも
つたクルル。

そして天使の翼を背負い、大鎌を携えた弥々華。

「究極ケロロ小隊、参上つてか？」

クルルが茶化した調子で笑う。

「アクアク、覚悟するであります！！」

ケロロは手を握りしめ、一步踏み出す。

ケロロ小隊のリベンジが始まろうとしていた。

To be continued

Episode:9 神の力

「「クルルさん！！」「

珍しく焦燥した黄色い背中が消える。

「まずい！！」

モアとリップ。2人は操縦桿に飛びついた。思い切り傾いたドックが、安定を取り戻す。

「はー……びっくりしたあ……」

リップは安心したように肩を落とした。

「モアさん。大丈夫？」

「はい。平気です」

僅かに表情を緩めたモアに、リップは微笑みかけた。

「それはよかつた」

「はい。それより……」

曇ったモアの顔に、リップは目を逸らす。笑顔の絶えないモアのその表情は見てはいけないもののような気がした。

「きっとクルルさんなら大丈夫。だからそんな顔しないで下さいよ」「そうだよ」

その声に、2人は振り向いた。

「ほら、あそこ」

イナが指差した方向は窓の外、彼方。戦いが起きている場所。

「あそこにみんないる。マケマケ様の力借りて」

「え？ マケマケ？」

初めて聞く名詞に面食らつリップ。一方モアの顔は歓喜に笑んだ。

「本ですか！？」

イナは首を縦に振る。

「本当だよ。イナ、ウソつかない」

イナの顔はどこか得意げだった。

「ケロロ小隊、全員出撃であります！！」

ケロロは思い切り右腕を伸ばす。ピンと伸ばされた人差し指。その先にはアクアクの姿がある。

「…………了解！！」「…………」

声が揃う。

ケロロ小隊はそれぞれの得物を構えると、アクアクに飛びかかった。先陣を切ったのはギロロだった。両手を交差させ銃を構える。銃声が弾ける。

マシンガンでも撃つたような連射に、アクアクの血が流れる。さらに肩へと繋がる両腕を弥々華は体を低くして、ドロロは直立に近いまま、刃を突き刺したまま駆け上がる。

「ぐあああああ……！」

耳障りな方向に、顔を歪めながらも駆け上がった2人は同時に飛び上がった。

「獅子戦吼！」

「風華燎乱！」

ドロロは斬撃から獅子を模した衝撃波、弥々華は黑白の衝撃波を飛ばす。

2つの衝撃波は頭に当たり、アクアクはふらりとよろけた。

「食らうですう！！」

そこに走り込むのはタママだ。着ぐるみのくちばしがパカリと開く。

「ハイドロポンプ！！」

くちばしから放たれたのは水。威力を秘めた水が、アクアクの額に突き刺さる。

「み…………水…………くそ…………よも俺様をコケに…………」

「コケになんてしてねえよ」

冷たい声にアクアクは上を向いた。そこにいたのは槍を掲げたクルル。

「クークッククック……天光満る所我はあり、黄泉の門開く所に汝あり。出でよ、神の雷。これで終わりだぜえ。インディグネイション！」

神の雷、その名に相応しい一撃が、アクアクを貫いた。

「……すごい」

避難した弥々華が、呻き声を上げた。アクアクは焦げ、目を見開いたまま動かない。

「見たありますか！！ 我輩達の実力を」

「貴様は何もしとらんだろう！！」

ゴンとギロロがケロロの頭を小突く。銃を持ったままなので威力は3割増だ。

「いつてえ……」

ケロロは頭を抑えたまま、小さく呻いた。
その時だった。

ピクリとアクアクの腕が動く。

「あいつ……」

弥々華が無意識に口を抑えた。

「貴様ら……」

低い低い、怨念がこもつた声に弥々華の背が泡立つ。

「俺様を舐めるのも大概にしろ！！ こうなつたら、全ての石像を集め、貴様ら全員道連れにしてやるわーー！」
アクアクは未だ傷の無い腕を伸ばした。

「あれは……！」

ドロロは空を見上げ、絶句した。

「石像か！？」

クルルは舌打ちする。すっかり失念していた。

空から落下する数百を超える石像の事を。

「止められないの！？」

「ここは我輩が！！」

弥々華の悲痛な叫びにケロロが舞い上がる。

空へ、高く。

「悠久なる空と海と大地に蓄えられし聖なる力よ。今こそ宿るであります……我が体に！！」

ケロロの手が、緑の光を放つ。ケロロは目を閉じ、待った。石像が近づく。

「隊長！！」

弥々華は半ば無意識に叫んだ。合図はその声だった。

「マケマケ

」

ケロロが回る。風は薄緑に色付き、暴風と化す。

「トルネ——ドツ——！」

それはまさに台風だつた。

ケロロが起こした風が石像を巻き込む。

「な……なにい！？」

標的はアクアクだった。石像は一目散にアクアクを目指す。次の瞬間、アクアクの体は石像で覆い尽くされた。

「す……」

リップは完全に腰を抜かしていた。こんなに凄まじい戦いは初めて見た。全身が総毛立つ感覚に、リップは無言で震えた。

その頃ドックはモアの手により地面に着陸した。戦いが起こった場所のすぐ近くだ。

3人はドックから降りると戦場を見つめた。

アクアクは石像に潰されピクリとも動かない。凄まじい。

これが神のスケール。

リップは無意識に唾を飲み込んだ。

「倒した……の？」

弥々華の問いかけにそれぞれが頷く。弥々華は深く息を吸い込んだ。
「やつた……！」

弥々華の体から力が抜ける。

「やつた！！ 勝ったんだ！！ アクアクにー！」

体が震える。

それほどに嬉しかった。

「弥々華殿。喜ぶのはまだ早いであります」

ポンとケロロの手が弥々華の肩に置かれた。弥々華は面食らつた顔で振り向く。

「アクアクを再封印しなければならないであります」

弥々華の表情が冷静さを取り戻す。

「そうだね……こんな事が2度と起こらないようにしなくちゃね」

弥々華の言葉は決して軽い物では無かつた。

「悠久なる空と海と大地に蓄えられし聖なる力よ
ケロロの声が空気を揺らす。

ケロロ小隊の面々は、アクアクを取り囲むように立ち、祈るよう手を組んでいた。頭の中に響く、マケマケの声が命じるようにな。

「今こそ、この物を縛る鎖となりて、諸悪を封じたまえ……」
……ありますと小声で付け足し言い放つ。

その瞬間だった。

体から力が抜けていくのを弥々華ははっきりと感じた。その時、小隊の面々の体から光が溢れ出す。

柔らかで穏やかな、だが威厳に満ちた光が、鎖の形を成した。

6本の鎖はアクアクの周りの石像に巻きつくと、それを締め上げた。石像はだんだん小さな塊になっていく。

そして。

手のひらに収まる大きさになつた。

鎖は更に巻きつくと、小さな光の玉になつた。

そして空へと飛んで行く。

「あ……」

弥々華は目を開くと、光の玉をぼんやりと眺めた。

それはケロロが前にアクアクを倒した場所に飛んでいき、姿を消した。

その時、弥々華は感じた。

自分の体に、自分らしい力が戻つてくるのが……。

To be continued

Episode・9 神の力（後書き）

えーとですね。

まずは謝らせて下さい。

「めんなさい！！　ふざけすぎました。

何を謝つているか分からない人しかいないと思うので説明します。
本文内で究極ケロロ小隊が登場しました。

その時のケロロと弥々華以外の格好が、全て声優ネタでした！！
技もその役にあつた技を使ってます。

なんだこれと思った方、大変申し訳ありませんでした。どうしても
やりたかったんです……。

と謝罪と言い訳はここまでです。元ネタが分かつた方、感想欄に書
いていただけると嬉しいです。

とりあえず一番最後に書く後書きに答えは乗せておきますけど。

Episode・10 終わりは始まり

「あー……」

大の字に弥々華は地面に横たわった。草の匂い。ちくちくした芝生の感触。抜けるように青い空。暑いけど柔らかな風。口を切つたせいか感じる鉄鑄臭い血の味。五感が、今まで麻痺したようだつた五感が世界を確かめ始めた。

「終わった」

弥々華はそう言って微笑した。終わったのだ。この戦いは。

「弥々華！！」

どのくらいこうしてていたのか分からぬ。弥々華はその言葉に目を開けた。芝生にも負けない緑が目に痛い。

「リップ」

「無事！？ 怪我しない？ 力は？」

起き上がった弥々華に、リップはあたふたと聞いかける。弥々華は苦笑に似た表情で、口を抑えた。

「大丈夫」

リップは弥々華を凝視する。疑うようにゆっくりと見つめたリップは、弥々華の手を取つた。

「良かつた……弥々華が無事で」

今にも泣き出しそうな顔でリップは弥々華を抱き締めた。

「~~~~~ッ！！」

「あー、リップ？」

ギロロはリップの体を軽く叩く。

「弥々華が死にそうだぞ」

渦中の弥々華は真っ青な顔で凍りついている。顔は歪んで酷いことにになっていた。

「あ……弥々華」

「トドメ刺すな……アバラ……逝つたかも……」

真っ青な顔の弥々華は、そう言ってリップにもたれ掛けた。

「軍曹おーーー!」

「おじさまあーーー!」

「冬樹殿!! モア殿!!」

駆け寄る冬樹にケロロが飛び付く。しかしもまた、温かな抱擁が交わされていた。

「軍曹、すつゝくかつこよかつたよーー!」

「そりや、もちろんでありますよ~」

謙遜のかけらもない言葉を言い、ケロロは相好を崩す。

「なんにもしてねえけどな、隊長」

クックと笑うクルルに、冬樹は苦笑しケロロは憤慨した。

「失敬な。我輩がトドメ、刺したのでありますよ」

「トドメだけだろ~が

「でも……」

突然、口を開いたモアにクルルは首だけで振り向いた。

「クルルさんもかつこよかつたですよ。ってゆ~か意氣揚々?」

「……それは違うだろ」

クルルは小声で突っ込んだ。

「もう、いなくなつちゃうの……？」

冬樹はどこか寂しげに問いかけた。田は暮れ、オレンジの夕焼けが辺りを満たしていた。

「ううん、違う、違う……！」

イナは元気を出すように、首を横に振り、笑った。

「アクアク、地下に封印された。また変な人が封印解きに来るかもしれない……。だから、守らなきや」

「イースター島を？」

弥々華の問いかけに、イナは首を縦に振った。

「うん。だから、眠る。封印を解かんとするもの現れる、その日まで」

イナの顔には決意が刻まれていた。

「イナ殿……」

「だから、また会つ日まで」

イナの体が浮き上がった。

「いつかまた」

手を降る。大きく大きく。

笑顔を零しながら、消えていく。

「イオラナーッ！」

薄くなつていくイナに、弥々華は心から敬礼をした。

「イオラナ、イナ。お休みなさい……」

手を降る、ケロロと冬樹を見ながら弥々華は僅かに微笑んだ。

「ありがとう」

イースター島が小さくなつていいく姿を、弥々華はぼんやりと眺めていた。

「本当に終わつたんだね」

弥々華は小さく囁くと、隣で熟睡するリップに視線を移した。肩に伝わる重みすら、心地良い。

「ああ」

「そうド！」やるな」

ギロロビロロロが重みのある声で頷いた。その時だった。

「あつ……」

ケロロが突然奇声を上げた。

弥々華は少し驚いて視線をずらす。

「なに……隊長、どうしたの？」

「書類……侵略記録証明書……間に合わないであります……」

弥々華が固まる。凍り付く。

「確かに期限、明日までじやなかつた？」

「うん……」

今にも泣きそうなケロロに、ギロロは頭を抱えた。

「なんでそんな大事な物黙つとつたんだ！」

「だつてギロロ怒るじゃん……」

「怒るじゃんとかそういう場合じや無いだろつ……！」

「ごつんとギロロはケロロに拳骨を食らわせた。

「痛い……なにするでありますか！？」もう

「逆ギレしとの場合か！？早く取りかかれ

「資料無いし無理でありますよ～。ね、弥々華殿？」

「ね、と言われても……」

弥々華は降参と言わんばかりに手を上げた。その間にも、言い争いは続いていた。

「……ん？」

あまりのやがましさのせいか、リップは目を覚ました。

「しー」

それを見たタママが指を口に当てて合図を送る。

「寝たフリしてたほうがいいですよ。じゃないと手伝えって巻き込まれます」

そう言つたタママはウインクを一つして、寝たフリに戻る。

「ありがとう」

そう呟いたリップはまた目を閉じた。

「はあ……」

あたしも寝よう。

弥々華はため息を吐き出すと、目を閉じる。この言い争いは日本に着くまで終わらないだろう。それまで寝た方が、よっぽど有益だ。どうせ手伝わなければならないのだから。不毛な口喧嘩はいまだに続いていた。

「アクアク、封印を確認しました。かなり厳重な封印です」「そうか……」

ジユエルの報告に、ナスカは軽く頷いた。

「やはり、ケロロ小隊は厄介だな」

「はい」

「で、k11計画はどうなつている?」

「はい。現在搜索が難航しており、計画実行まではもうしません……」

「分かった」

ナスカはまた頷いた。

「それと……」

「なんでしょうか」

「空間転移装置の完成は？」

「まだです。半分も完成していません」

「急がせろ。これで最後だ、空間コードを変更せろ」

「はい？」

「ケロロ小隊、奴らも厄介だ。同時に囮い込む」

「はい、了解致しました」

「伝えろ」

「はい、失礼しました」

そう言つて、ジュエルは頭を下げた。

部屋からいなくなつたのを見て、ナスカはため息を吐き出す。

「……時間稼ぎにしか、ならないとはな」

吐き捨てられたその声に、答えるものはいない、はずだった。

「ナスカ様」

「……シャドウか」

どこからか聞こえる声に、ナスカは顔を上げた。

目の前にはいつあらわれたのか、シャドウの姿があった。

「言われていた物を入手しました。ですが、人間のものではありますせんが」

出したものは、1枚のCD-ROM。

「ケロンの物です」

「なら新しい成果も必要だな」

そう言つてナスカは何かを取り出した。

「新聞？」

「ああ。これを見ろ」

「……海底の遺跡発掘へ。海底都市の建設現場……なんの関係があるのですか？」

「ミラーが面白いものを見つけた。それを素体にする」

「分かりました」

「あと、面白い人間を見つけた。能力者ではないがね」

「くくと、ナスカは笑う。

「話をしておいでくれ。」この男に

「はい」

取り出した写真を受け取り、シャドウが従順に頷く。後ろ姿を眺めながらナスカはまた笑った。

「計画は予定より早く進みそうだな」

Continues to "Cross World".
（これは世界の交錯へ続く物語）

あとがき

皆さん、今晚は。作者の百花です。

本日は小説家になろう 超小説版ケロロ軍曹 + black & white であります 2 誕生！ 究極ケロロ小隊 もう一つの時空島をお読み下さいまして、本当にありがとうございます。

あまり長くない物語を書こうと始めた小説ですが、やっぱりそれなりの長さになってしまったのですね……。

それではまず、本編中で描いたマケマケ小隊の元ネタの答えを書いていきます。

タママ ポッチャマ（ポケモンDP）
クルル ジェイド・カーテイス（テイルズ オブ ジ アビス）
ドロロ クレス・アルベイン（テイルズ オブ ファンタジア）
ギロロ アーカード（HELLSING）

でした。ちなみにアーカードの技は最強＆見た目がグロテスクなので銃の乱射が技となりました。

これ元ネタ全て分かつた人、いますかね？
個人的にはどうしてもやりたかったので満足です！！

次に、アクセス&PV数をメモしておきます。

累計PV：1,668 アクセス：740人

でした！！
よんでも下さった皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。

た。

最後になりますがここでスペシャルサンクスです。

感想欄をご覧になつた方もいらっしゃると思いますが、この作品はあるコーネリアさんのアイデアを使って作った作品です。本文の一部も使わせて頂いています。

明確な許可は頂け無かつたのでコーネリア名は伏せさせて頂きますが、この場を借りてお礼を言わせて下さい。

本当に様々なアイデアを頂き、ありがとうございました。

自分では思いつかなかつたアイデアの数々は、本当に嬉しかつたです。

ありがとうございました。

それではまた、Cross wordでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828o/>

超小説版ケロロ軍曹 + black & whiteであります2誕生！究極ケロロ小隊もう
2011年8月12日21時55分発行